

大学等名	富山県立大学
プログラム名	データサイエンスリテラシー

リテラシーレベルのプログラムを構成する授業科目について

① 教育プログラムの修了要件 学部・学科によって、修了要件は相違しない

② 対象となる学部・学科名称

③ 修了要件

科目「データサイエンスリテラシー」について、授業時間の3分の2以上出席し、試験及びレポート等の点数または内容が、60点以上であること。

必要最低科目数・単位数 1 科目 2 単位 履修必須の有無 令和6年度以前より、履修することが必須のプログラムとして実施

④ 現在進行中の社会変化(第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会等)に深く寄与しているものであり、それが自らの生活と密接に結びついている」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必須	1-1	1-6	授業科目	単位数	必須	1-1	1-6
データサイエンスリテラシー	2	○	○	○					

⑤ 「社会で活用されているデータ」や「データの活用領域」は非常に広範囲であって、日常生活や社会の課題を解決する有用なツールになり得るもの」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必須	1-2	1-3	授業科目	単位数	必須	1-2	1-3
データサイエンスリテラシー	2	○	○	○					

⑥ 「様々なデータ利活用の現場におけるデータ利活用事例が示され、様々な適用領域(流通、製造、金融、サービス、インフラ、公共、ヘルスケア等)の知見と組み合わせることで価値を創出するもの」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必須	1-4	1-5	授業科目	単位数	必須	1-4	1-5
データサイエンスリテラシー	2	○	○	○					

⑦ 「活用に当たっての様々な留意事項(ELSI、個人情報、データ倫理、AI社会原則等)を考慮し、情報セキュリティや情報漏洩等、データを守る上での留意事項への理解をする」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必須	3-1	3-2	授業科目	単位数	必須	3-1	3-2
データサイエンスリテラシー	2	○	○	○					

⑧「実データ・実課題(学術データ等を含む)を用いた演習など、社会での実例を題材として、「データを読む、説明する、扱う」といった数理・データサイエンス・AIの基本的な活用法に関するもの」の内容を含む授業科目

授業科目	単位数	必須	2-1	2-2	2-3	授業科目	単位数	必須	2-1	2-2	2-3
データサイエンスリテラシー	2	○	○	○	○						

⑨ 選択「4. オプション」の内容を含む授業科目

授業科目	選択項目	授業科目	選択項目

⑩ プログラムを構成する授業の内容

授業に含まれている内容・要素	講義内容
(1)現在進行中の社会変化(第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会等)に深く寄与しているものであり、それが自らの生活と密接に結びついている	1-1 社会で起きている変化(キーワード「ビッグデータ、IoT、AI、ロボット、データ量の増加、計算機の処理性能の向上、AIの非連続的進化、第4次産業革命、Society5.0、データ駆動型社会、複数技術を組み合わせたAIサービス、人間の知的活動とAIの関係性、データを起点としたものの見方、人間の知的活動を起点としたものの見方」)「データサイエンスリテラシー」(データサイエンス学科1回目等)
	1-6 データ・AI利活用の最新動向(キーワード「AI等を活用した新しいビジネスモデル(シェアリングエコノミー、商品のレコメンデーションなど)、AI最新技術の活用例(深層生成モデル、敵対的生成ネットワーク、強化学習、転移学習など)」)「データサイエンスリテラシー」(データサイエンス学科5回目等)
(2)「社会で活用されているデータ」や「データの活用領域」は非常に広範囲であって、日常生活や社会の課題を解決する有用なツールになり得るもの	1-2 社会で活用されているデータ(キーワード「調査データ、実験データ、人の行動ログデータ、機械の稼働ログデータなど、1次データ、2次データ、データのメタ化、構造化データ、非構造化データ(文章、画像/動画、音声/音楽など)、データ作成(ビッグデータとアニメーション)、データのオープン化(オープンデータ)」)「データサイエンスリテラシー」(データサイエンス学科2回目等)
	1-3 データ・AIの活用領域(キーワード「データ・AI活用領域の広がり(生産、消費、文化活動など)、研究開発、調達、製造、物流、販売、マーケティング、サービスなど、仮説検証、知識発見、原因究明、計画策定、判断支援、活動代替、新規生成など)」)「データサイエンスリテラシー」(データサイエンス学科3回目等)
(3)様々なデータ利活用の現場におけるデータ利活用事例が示され、様々な適用領域(流通、製造、金融、サービス、インフラ、公共、ヘルスケア等)の知見と組み合わせることで価値を創出するもの	1-4 データ・AI利活用のための技術(キーワード「データ解析:予測、グルーピング、パターン発見、最適化、シミュレーション・データ同化など、データ可視化:複合グラフ、2軸グラフ、多次元の可視化、関係性の可視化、地図上の可視化、挙動・軌跡の可視化、リアルタイム可視化など、非構造化データ処理:言語処理、画像/動画処理、音声/音楽処理など、特化型AIと汎用AI、今のAIで出来ることと出来ないこと、AIとビッグデータ、認識技術、ルールベース、自動化技術)」)「データサイエンスリテラシー」(データサイエンス学科4回目等)
	1-5 データ・AI利活用の現場(キーワード「データサイエンスのサイクル(課題抽出と定式化、データの取得・管理・加工、探索的データ解析、データ解析と推論、結果の共有・伝達、課題解決に向けた提案)、流通、製造、金融、サービス、インフラ、公共、ヘルスケア等)におけるデータ・AI利活用事例紹介」)「データサイエンスリテラシー」(データサイエンス学科5回目等)

(4) 活用に当たっての様々な留意事項 (ELSI、個人情報、データ倫理、AI社会原則等)を考慮し、情報セキュリティや情報漏洩等、データを守る上での留意事項への理解をする	3-1	データ・AIを扱う上での留意事項(キーワード「ELSI(Ethical, Legal and Social Issues)、個人情報保護、EU一般データ保護規則(GDPR)、忘れられる権利、オプトアウト、データ倫理、データのねつ造、改ざん、盗用、プライバシー保護、AI社会原則(公平性、説明責任、透明性、人間中心の判断)、データバイアス、アルゴリズムバイアス、AIサービスの責任論、データ・AI活用における負の事例紹介」)「データサイエンスリテラシー」(データサイエンス学科11, 12回目等)
	3-2	データを守るうえでの留意事項(キーワード「情報セキュリティ、機密性、完全性、可用性、匿名加工情報、暗号化、パスワード、悪意ある情報搾取、情報漏洩等によるセキュリティ事故の事例紹介」)「データサイエンスリテラシー」(データサイエンス学科13, 14回目等)
(5) 実データ・実課題(学術データ等を含む)を用いた演習など、社会での事例を題材として、「データを読む、説明する、扱う」といった数理・データサイエンス・AIの基本的な活用法に関するもの	2-1	データを読む(キーワード「データの種類(量的変数、質的変数)、データの分布(ヒストグラム)と代表値(平均値、中央値、最頻値)、代表値の性質の違い(実社会では平均値＝最頻値でないことが多い)、データのばらつき(分散、標準偏差、偏差値)、観測データに含まれる誤差の扱い、打ち切りや脱落を含むデータ、層別の必要なデータ、相関と因果(相関係数、擬似相関、交絡)、母集団と標本抽出(国勢調査、アンケート調査、全数調査、単純無作為抽出、層別抽出、多段抽出)、クロス集計表、分割表、相関係数行列、散布図行列、統計情報の正しい理解(誇張表現に惑わされない)」)「データサイエンスリテラシー」(データサイエンス学科6回目等)
	2-2	データを説明する(キーワード「データ表現(棒グラフ、折線グラフ、散布図、ヒートマップ)、データの図表表現(チャート化)、データの比較(条件をそろえた比較、処理の前後での比較、A/Bテスト)、不適切なグラフ表現(チャートジャンク、不必要な視覚的要素)、優れた可視化事例の紹介(可視化することによって新たな気づきがあった事例など)」)「データサイエンスリテラシー」(データサイエンス学科7回目等)
	2-3	データを扱う(キーワード「データの集計(和、平均)、データの並び替え、ランキング、データ解析ツール(スプレッドシート)、表形式のデータ(csv)」)「データサイエンスリテラシー」(データサイエンス学科8, 9, 10回目等)

⑪ プログラムの学修成果(学生等が身に付けられる能力等)

<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会におけるデータ・AIの利活用事例を理解する 2. データを読む、データを説明する、データを扱う方法について理解する 3. データ・AIを扱い、またデータを守る上での留意事項を理解する
--

リテラシーレベルのプログラムの履修者数等の実績について

- ①プログラム開設年度 年度(和暦)
- ②大学等全体の男女別学生数 男性 人 女性 人 (合計 人)
 (令和6年5月1日時点)
- ③履修者・修了者の実績

学部・学科名称	学生数	入学定員	収容定員	令和6年度		令和5年度		令和4年度		令和3年度		令和2年度		令和元年度		履修者数合計	履修率
				履修者数	修了者数												
工学部	1,419	235	1,325	258	246											258	19%
情報工学部	171	160	640	171	164											171	27%
看護学部	480	120	480	121	120											121	25%
																0	#DIV/0!
																0	#DIV/0!
																0	#DIV/0!
																0	#DIV/0!
																0	#DIV/0!
																0	#DIV/0!
																0	#DIV/0!
																0	#DIV/0!
																0	#DIV/0!
																0	#DIV/0!
																0	#DIV/0!
																0	#DIV/0!
																0	#DIV/0!
合計	2,070	515	2,445	550	530	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	550	22%

大学等名

教育の質・履修者数を向上させるための体制・計画について

① 全学の教員数 (常勤) 人 (非常勤) 人

② プログラムの授業を教えている教員数 人

③ プログラムの運営責任者
 (責任者名) (役職名)

④ プログラムを改善・進化させるための体制(委員会・組織等)

 (責任者名) (役職名)

⑤ プログラムを改善・進化させるための体制を定める規則名称

⑥ 体制の目的

⑦ 具体的な構成員

教授	川端 繁樹
准教授	畠山 友行
講師	小林 香
講師	吉見 和紘
教授	大島 拓
准教授	大坂 一生
教授	榊原 一紀(座長)
教授	大山 英明
准教授	森重 健一
准教授	村田 美代子

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度【リテラシーレベル】

⑧ 履修者数・履修率の向上に向けた計画 ※様式1の「履修必須の有無」で「計画がある」としている場合は詳細について記載すること

令和6年度実績	22%	令和7年度予定	50%	令和8年度予定	75%
令和9年度予定	100%	令和10年度予定	100%	収容定員(名)	2,445
具体的な計画					
<p>令和6年度より「データサイエンスリテラシー」を全学部の1年生必修科目として開講した。また、令和7年度以降は再履修クラスを設ける予定である。これにより、令和10年度には、全学生の履修率及び卒業時のデータサイエンスリテラシーレベルの修得率が100%となる。</p>					

⑨ 学部・学科に関係なく希望する学生全員が受講可能となるような必要な体制・取組等

<p>全学部の1年次生必修科目としている。</p>

⑩ できる限り多くの学生が履修できるような具体的な周知方法・取組

<p>全学部の1年次生必修科目としている。</p>

⑪ できる限り多くの学生が履修・修得できるようなサポート体制

全学部の1年次生必修科目としており、全ての学生が履修・修得しなければならない体制をとっている。

⑫ 授業時間内外で学習指導、質問を受け付ける具体的な仕組み

授業は原則対面で実施しているため、授業中や授業後において教員へ直接質問することが可能である。また、オフィスアワー(教員があらかじめ研究室等に常駐する時間を定め、学生が確実に教員に質問・相談できる時間)のほか、全学生にオンラインのグループウェアツールであるMicrosoft Teamsをインストールさせ、Teams内にデータサイエンスリテラシー科目のチームを学科ごとに作成している。これにより、学生は、授業時間以外にインターネット上でも相談できる環境となっている。

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

教務委員会(全学)	
(責任者名) 中島 範行	(役職名) 教務委員会(全学)委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	令和6年度より「データサイエンスリテラシー」を全学部の1年生必修科目として開講した。令和6年度では1年次生550名全員が本教育プログラムの科目を履修し、修得率は96.4%であり、ほぼ全ての学生が修得している状況である。 令和6年度に未修得となった学生に対しては令和7年度に再履修クラスを設ける予定である。
学修成果	本教育プログラム(データサイエンスリテラシー科目)受講者全員に対して実施している授業アンケートを分析することによって、学生の理解度を把握している。アンケート結果については次の項目に記載のとおり。 また、ワーキンググループにおいても、内容の理解度や独自教材の改善点等、授業の振り返りを実施しており、教員、学生双方の視点から学修成果を分析している。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	本教育プログラム(データサイエンスリテラシー科目)受講者全員に対して実施した授業アンケートのうち、理解度の目安に関する設問「授業科目の内容は理解できましたか」では、78.7%の学生が「よく理解できた」または「ある程度理解できた」と回答していることから、各学科の専門性の都合上、学科ごとの理解度には多少の差はあるものの、全体として一定程度の理解は得られたものと評価できる。
学生アンケート等を通じた後輩等の学生への推奨度	本教育プログラム(データサイエンスリテラシー科目)受講者全員に対して実施した授業アンケートのうち、興味の度合いに関する設問「授業科目に関連する分野について興味がわきましたか」という問いに対し、興味がわいたと回答した学生が全体の72.4%であった。このことから学科を問わず多くの学生がデータサイエンス分野への興味・関心については一定程度の好評を得たと考えられ、今後、後輩等への評判を通じた興味・関心の高まりも期待できる。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	前述のとおり、令和6年度より「データサイエンスリテラシー」を全学部の1年生必修科目として開講した。令和6年度では1年次生550名全員が本教育プログラムの科目を履修し、修得率は96.4%であり、ほぼ全ての学生が修得している状況である。 未修得の学生に対しては令和7年度以降、再履修クラスを設ける予定であり、令和10年度には、全学生の履修率及び卒業時のデータサイエンスリテラシーレベルの修得率は100%となる。
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本教育プログラムは令和6年度より導入しているため、修了者の評価は令和10年度以降に可能となる。学生のキャリア形成を支援する富山県立大学キャリアセンターと連携し、本学の卒業生に係る進路状況を把握しているため、本教育プログラムの修了者が出た後は、進路等の把握・分析をすることができると考えている。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本学では、県内企業が会員となり、産学連携を推進している「富山県立大学研究協力会」や、DX推進を目的とし県内企業等が会員となる「富山県立大学DX教育研究センターアソシエイト会員」制度を設けており、企業の意見を伺う機会が多くある。また、情報工学部データサイエンス学科では、公益財団法人 環日本海環境協力センター(NPEC)から講師を招いて行う連携授業を実施しており、より実践的で効果的な内容となるよう工夫のうえ実施した。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	授業アンケート設問「授業科目に関連する分野について、自ら進んで調べる意欲や自主的に学習する意欲が高まりましたか。」について、「かなり高まった」、「ある程度高まった」と回答した学生が全体の60.2%であったことから、「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させるという観点において一定程度の効果を得られたと評価できる。 ワーキンググループでは、授業の振り返りを踏まえ、学科の専門性に適した内容の追加や、動画の見せ方についても、より興味を引くような形にするようイントロを行う等、来年度以降は、より「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させられるような改善を検討している。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	授業アンケート設問「授業科目の内容は理解できましたか。」について、「あまり理解できなかった」、「ほとんど理解できなかった」と回答した学生が全体の21.3%いることから、その要因を分析し、分析結果を踏まえてより「分かりやすい」授業となるような改善を検討する。 ワーキンググループでは、授業の振り返りを踏まえ、講義スライドの導入や講義順序の入れ替え、excelを使う時間を増やす、学生と教員間のやり取りの機会を増やす等、来年度以降は、内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすることによる改善を検討している。

大学等名：富山県立大学

プログラム名：データサイエンスリテラシー

数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度 プラス申請書

申請単位	リテラシーレベル
------	----------

① 授業内容

本学の教育プログラムである授業科目「データサイエンスリテラシー」は、授業内容に関して次のとおりの特色を有している。

1 全学展開における授業内容

本学では、データサイエンス教育の導入に関する検討を行うためにデータサイエンス教育検討委員会を設置し、また、全学科から選出された教員によって構成するワーキンググループによって「データサイエンスリテラシー」で使用する動画に関する議論を進めてきた。このような推進体制を構築することにより、富山県立大学の現状やその特色を踏まえながら、各学科の専門性とデータサイエンスの融合のあり方を、以下に示すような形で具現化することが可能となった。

「データサイエンスリテラシー」で使用する動画は、ワーキンググループでの議論を経て、本学の教員が作成した本学独自のコンテンツである。動画では、数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアムが策定したモデルカリキュラムの学修内容を踏まえ、本学の教員がスライド資料を用いながら解説を進めていく構成となっており、データサイエンスの基礎を分かりやすく学ぶことができる。

これは、文部科学省高等教育局が制定した「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）実施要綱細目」で定められている5つの審査項目に対応するモデルカリキュラムの内容を全て網羅した構成となっており、学部や担当教員が変わったとしても、必要最低限の修得内容は担保されている。

2 学科別の特色

「データサイエンスリテラシー」の授業内容の構成については、上記の共通動画を3分の2程度とし、残りの3分の1は各学科の分野に応じた内容で構成している。

このため、データサイエンスを単なる知識として理解・修得するのではなく、各学科の専門分野において今後活用できる知識・技術として提供している。

具体例として、看護学部看護学科では、データの取り扱いにおいて「ていねいな保健統計学」を用い、統計学の基礎知識の講義を丁寧に行ったうえで、関連した Excel を用いた計算・数列の作成や、統計計算の演習を実施している。データの取得先も学科の専門（厚生労働省を中心）に合わせるよう工夫を行っている。工学部生物工学科、医薬品工学科では、実際に生物工学、医薬品の学習、研究に必要とされるデータベース等を実際に操作することで、データサイエンスを学修する意義を実感させている。情報工学部知能ロボット工学科では、演習の際に、人間の生体信号（手指の運動中の筋電図）のデータを扱った（UC Irvine Machine Learning Repository のデータの一部）。Excel を使って時系列データを可視化したり簡単な演算を行うとともに、実験条件によってどのような特徴の違いがあるのか調べた。さらに、このデータがオープンデータの具体的な例であること、どのようにして機械学習で特徴を見分ければ良いのか、実験参加者から得られたデータをインターネット上に公開するにあたり気をつける点など、テキストを用いて説明してきた内容を具体的な事例を通じて振り返ることができるよう努めた。

② 学生への学習支援

学生への学習支援に関して、次のとおりの特色を有している。

1 本学独自動画（授業）のアーカイブ配信

「データサイエンスリテラシー」で使用する動画は、原則として対面授業で活用しているが、授業各回の課題や内容に応じて時間外に自宅等でも動画視聴できるよう、**Microsoft Stream(on SharePoint)**でアーカイブ配信を行うことを可能とする体制をとっている。

2 本学の「データサイエンスリテラシー」の授業内容の構成については、共通動画を3分の2程度とし、残りの3分の1は各学科の分野に応じた内容で構成している。各学科によって専門性に差があることから、学習支援については一律に行うのではなく、各学科の専門性や理解度の状況に応じた工夫をしている。

具体例として、看護学部看護学科では、**Excel**の作業手順の詳細（**PowerPoint**で作成したもの）のpdfを配布して、講義中の参照、反復学習が可能になっている。

工学部機械システム工学科では、授業に**TA**を配置することで、**PC**の設定やソフトの効果的な利用法を実践する際の補助及び**Excel**を用いたデータ分析の実践において、わからない点はその場で質問ができるような体制をとっている。

情報工学部データサイエンス学科では、学科内の系統立てたカリキュラムを実践するに当たり、「データサイエンスリテラシー」と類似科目と連動させ、演習課題の共有や、**TA**を活用するなどし、週内に2回程度フォローする機会を設ける体制をとっている。

情報工学部知能ロボット工学科では、各回の講義の最後に、講義支援システムを用いて小テストを実施し、正答率が低かった問題については、翌週の授業の冒頭に解説を行い、すべての学生が理解できるような体制をとっている。各設問の正答率やレスポンスタイムに加え、選択肢のある設問の場合はそれぞれの選択肢が選ばれた割合も示すことで、クラス全体の理解度や間違いやすいポイントをデータとしてフィードバックするように努めた。授業で利用した動画は、概ね1週間後に、**Microsoft Stream**でオンデマンド配信し、学生の振り返りの勉強に役立てられるようにした。

なお、各学科の学習支援方法については、ワーキンググループ内で共有し、横展開が可能になるような体制をとっている。

3 学生への細やかな修得・履修サポート

本学では、**Microsoft Teams**を活用し、**Teams**内にデータサイエンスリテラシーの授業（学科）ごとのチームを作成している。各授業のチーム内において、教員と学生が双方向に質問・対応することが可能となっており、学生は授業時間以外でも、インターネット上で相談できる環境となっている。また、データサイエンスリテラシーを担当する全教員がオフィスアワー（教員があらかじめ研究室等に常駐する時間を定め、学生が確実に教員に質問・相談できる時間）を確保しており、対面でも質問・相談に応じる体制を整えている。

③ その他の取組（地域連携、産業界との連携、海外の大学等との連携等）

その他の取組として、以下の取組を実施している。

1 地域に開放した授業

本学では科目等履修生を募集しており、本学の学生以外の方でも「データサイエンスリテラシー」を履修することが可能となっている。なお、当該科目の修了の認定がなされた場合には本学の単位が与えられる。

2 産業界（企業）との連携

県内企業が会員となり、産学連携を推進している「富山県立大学研究協力会」や、DX推進を目的とし県内企業等が会員となる「富山県立大学DX教育研究センターアソシエイト会員」制度を設けており、企業の意見を伺う機会が多くある。

また、データサイエンス学科では、公益財団法人環日本海環境協力センター（NPEC）にご協力いただき、環境（海洋）データを題材にしたデータサイエンスの講義及び実習を行うなどの応用的な教育を行った。

こうした機会を活用し、本プログラムの改善・進化に役立てている。

3 海外の大学等との連携

本学ではこれまでも様々な分野において海外の大学等との連携を進めており、ドイツ、タイの大学との共同研究による学生の受入及び派遣や、毎年度実施している瀋陽化工大学（中国）との交換留学生の受入（派遣）やポートランド州立大学（米国）への語学研修派遣等による学生交流、米国オレゴン州の大学生等と富山県の大学生等が共同チームとなってプレゼンテーションを行う「オレゴンカップ英語プレゼンテーションコンテスト」への参加等、多くの実績がある。

さらに令和6年度は、シリコンバレーにオフィススペースと会議スペースをシェアオフィスの形で確保し、本学の学生や教職員が利用できるようにした。さらに、富山県とインドのアンドラプラデシュ州が5項目からなる協定を再締結したことに伴い、項目の一つである「人的及び学術交流の」一環で、本学とアンドラ大学がデータサイエンスを介した共同研究や学術交流に向けて協議を開始した。

大学等名	富山県立大学大学	申請レベル	リテラシーレベル
教育プログラム名	データサイエンスリテラシー	申請年度	令和7年度

取組概要

●プログラムの目的

社会で起きている変化を知り、数理・データサイエンス・AIを学ぶことの意義を理解する。また、どんなデータが集められ、どう活用されているかを知り、様々な領域でデータ・AIが活用されていることを学ぶこと

●身に付けられる能力

- ・データ・AIを活用するために使われている技術を理解する
- ・データを適切に読み解き学ぶ力を理解する
- ・各専門でのデータの利活用について、最新事例を踏まえながら具体的に理解する

●開講されている科目の構成：データサイエンスリテラシー

●修了要件

科目「データサイエンスリテラシー」について、授業時間の3分の2以上出席し、試験及びレポート等の点数または内容が、60点以上であること

●実施体制

プログラムを改善・進化させるための体制：データサイエンスリテラシー科目ワーキンググループ
プログラムの自己点検・評価を行う体制：教務委員会（全学）

●先導的で独自の工夫・特色

- ・全学部（工学部・情報工学部・看護学部）1年次生の必修科目として令和6年度から開講
- ・授業内容は、本学教員が作成したオリジナルの動画を使用した全学共通の内容を3分の2とし、残り3分の1を各学科の分野に応じた内容で構成。データサイエンスを単なる知識として理解・修得するのではなく、各学科の専門分野において、今後活用できる知識・技術として提供
- ・Microsoft Teams内にデータサイエンスリテラシーの授業（学科）ごとのチームを作成することで、授業時間外でも各授業のチーム内において、教員と学生が双方向に質問・対応することが可能
- ・科目等履修生を募集しており、本学の学生以外の方でも「データサイエンスリテラシー」を履修することが可能